

- 2) Setoguchi, T., (in press): Geology and Paleontology of Badwater Creek Area, Central Wyoming. Part 16. The Cedar Ridge Local Fauna (Late Oligocene). Bull. Carnegie Mus.

報告その他

- 1) 江原昭善・松本真(1978): 掛川市出土の横穴古墳人骨

学会発表その他

- 1) シシバナザル (*Simias concolor*) の鼻骨の形態について

江原昭善

第31回人類学・民族学連合大会

- 2) シシバナザルの頭骨の形態特徴

江原昭善

第82回日本解剖学会総会

- 3) 霊長類の性的二型

江原昭善

第5回日本性科学学会講演

幸島野外観察施設

岩本光雄(施設長・兼)・森 明雄

幸島をめぐる観光開発や観光客の増大によるフィールド維持の困難さは持続している。この問題は基本的には、国による管理体制をとることが最も望ましい解決法であろう。

52年3月、幸島と本土の間の海域に砂が堆積し、干潮時には陸続きになる現象が起った。このため観光客は自由に渡島でき、またサルが観光客の餌にひかれて本土に渡る可能性ができており、その管理に大きな努力を注いだ。夏には陸と島が離れたが、53年2月再び島が陸続きになり始めた。

《群れの状況》

幸島に生息するニホンザルは91頭(53年3月現在)である。51年から目立つようになった夏期におけるメスのヒトリザル化が52年5月頃から再び起った。52年10月頃から、こうしてヒトリザル化したメスが集まり、それにオトナオスのノボリが加わって10頭からなる小グループができた。このグループは交尾期になって再び主群に吸収された。この夏に群れのまとまりが悪くなる現象は、観光客その他の人による影響と考えられ、それを防止するためと、ここ数年、子ザルの成長の遅延が目立ったので、その回復を計るための2つの目的で52年7月10日～9月5日に、毎朝群れに大豆を給餌した。

研究概要

- 1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

森 明雄・三戸サツエ

冠地富士男・山口直嗣

前年度からの継続で、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集している。毎月1回はほぼ全個体の体重測定を行っている。社会学的研究については、通年の変化や、個々のトピックについて調べている。夏における給餌の結果、季節はずれに、メスの sexual swelling が見られたので、この問題を性成熟および性行動の観点から解析した。

- 2) ニホンザルの小グループの研究

森 明雄

幸島でできた分裂群は、大変小さなグループであり、このグループの分析を行なうことによって社会構造の骨格を明らかにしようと試みた。

- 3) 内部寄生虫に関する研究

今田勲(宮崎大)・森 明雄

内部寄生虫卵の季節変化を、毎月1回、個体毎に採糞することにより、定量的に調べた。

なお、52年度に本施設を利用した共同利用研究者は岩本俊孝(宮崎大)である。その他、長期滞在し、利用した研究者は、早木仁成(京大)、今田勲(宮崎大)、菅原和孝(京大)、森梅代(京大)等である。本年度に、本施設を訪問あるいは利用した研究者は、延べ289人であった。

なお、本年度は、実験室で研究を行なっている大学院生も、院生実習として幸島でフィールド・ワークを行い、大変意義深い経験をした。

論文

- 1) 森明雄・森梅代・岩本俊孝(1977): 幸島の野生ニホンザルの群れにおけるメスの間の順位変動について。“形質・進化・霊長類”(加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編), pp. 311-334, 中央公論社, 東京。
- 2) Mori, A. (1977): Intra-troop spacing mechanism of the Japanese monkeys of the Koshima troop. *Primates*, 18, 331-357.
- 3) Mori, A. (1977): The social organization of the provisioned Japanese monkey troops which have extraordinary large population sizes. *The Journal of Anthropological Society of Nippon*, 85, 325-345.

学会発表

- 1) 幸島におけるニホンザルメスのヒトリザル化と新群形成について

森 明雄

第22回プリマーテス研究会(1978)